

| | |
|--------------|---|
| Title | フランス語初級文法学習のための環境 |
| Author(s) | 岩根, 久 |
| Citation | サイバーメディア・フォーラム. 2019, 19, p. 15-18 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/73406 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

フランス語初級文法学習のための環境

岩根 久 (大阪大学 言語文化研究科)

1. はじめに

大阪大学の全学共通教育科目では英語以外の外国語を初修外国語（外国語学部が提供している外国語の授業科目があるので、かなり多くの外国語を学ぶことができる）と位置づけて、そのうちドイツ語、フランス語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、中国語、朝鮮語は、第2外国語として履修することができる（ただし、学部によって第2外国語として履修できないものもある）。フランス語初級文法は、フランス語を第2外国語として選んだときに、「フランス語初級Ⅰ」「フランス語初級Ⅱ」の授業の枠内で1年時に習得するよう設定されている。

さて、以上はカリキュラムの話であるが、これ以降は文法について考えてみようと思う。元来、子供が母語を身につける際には「文法」などという意識はない。ただし、言語がコミュニケーションのツールである限り、そこには何らかのルールがあるはずである。そのルールの総体のことを「文法」と呼ぶとするなら、これは言語学的な「文法」であり、学問研究の対象となる。これとは違って、母語以外の言語を母語の環境の中で学習するとき（たとえば、日本で英語を学んだり、フランス語を学んだりする場合）、学習する言語がどのようなことばの仕組みになっているのかを知っておくことは、学習を効率的に進める上で有効であるし、また、それは、母語との違いを知るための知的な営みのひとつでもある。このような学習のために、基本的なことばの仕組みをまとめたものが「学習文法」と呼ばれるものである。言語学的な「文法」は習得を目指したものではないが、「学習文法」は習得を目指したものであって、それ故、学ぶことが可能である一方、完全なものではない。

中学3年になって、英語の語彙も一通り増え、英文法についても一通り学んだとき、これで辞書さえあれば、どんな英語の文章でも読めるかも知れない

と思い、ひとり嬉しくなったことがある。すぐに、英語で書かれたイソップ物語を読もうとしたが、話の内容はもともと日本語で読んで知っていたものの、個々の表現のあちこちでひっかかって、意味がわからず泣きそうになった。後に、英語の学習経験を経たあと、その意味がやっと理解できた。つまり、英語の構文についての知識が深まったため、理解できたのである。

フランス語の初級の授業の目標は、「これで辞書さえあればどんなフランス語の文章でも読める」という気になるまで学習者を導くことである。実際はそうはならないので、さらなる学習経験が必要となり、中級の授業が必要になってくる。

さて、大阪大学における学習環境は、時代とともに変化してきているが、本稿では、フランス語の初級文法学習のための環境について述べてみたい。

2. CALL 導入以前

1985年に大阪大学の教壇に立って以来、2000年にCALL教室が設置されるまでの15年間は、普通の教室あるいはLL教室を使って授業を行っていた。90年台になって、パソコンやネットの環境は徐々に整備されつつあったが、それらがフランス語の学習環境にあったわけではない。

そもそも、環境がどうであろうと、フランス語の初級の授業の目標は変わらない。それを明確化するために、現在、大阪大学のフランス語初級の授業では、フランス語の専任教員全員で制作した文法教科書（春木仁孝他著『新・フランス語文法』、朝日出版社、初版2003年）を共通教科書とし、また、初級授業の受講者全員に対して毎年1月にフランス語共通テストを実施し（1998年より）、文法知識習得の達成度を確認している（ただし、このテストは、達成度の判定というよりむしろ、このテストを目指した学習意欲の向上に重点が置かれている）。

語彙習得の目標は、初級の授業の1学期はフランス語検定5級レベルの語彙、2学期は4級レベルの語彙である。また、初級の1年間で、基本的な動詞の法・時制・人称による形態の変化（これを「活用」という）を習得しなければならない。

CALL 導入以前、語彙の学習については、パソコンのワープロソフトで作成した語彙リストを配布し、小テストをするなどして学習を促していた。学生は英語学習の経験をもとに自ら単語帳を作るなど、それぞれ工夫していたようである。

動詞の活用については、発音しながら書いて覚えるように指導し、授業中にメトロノームにあわせて活用を言う練習をしたりもした。

文法項目の学習については、各文法事項について前回の授業で学んだ文法事項のいくつかについて、独自に作成した小テストを用いて確認を行った。後には、これらの小テストをもとに制作した、拙著『きりとりテスト 10分間でフランス語』（第三書房、初版1997年）を利用した。この冊子は、奇数ページが各文法項目の簡単な説明、裏面の偶数ページが確認のための穴埋め問題10問から構成されていて、切り取って提出できる体裁になっている。2回目以降、毎回の授業の最初にこのテストを行い、黒板やホワイトボードで正解を確認しながら自己採点をしてもらったあと、質問・コメントを書いて提出してもらい、教員側ではそれらにコメントを加えて次回の授業で返却した。

教科書の練習問題については、授業中に指名した受講者に黒板・ホワイトボードに答案を書いてもらい、それに対して添削を行った。この活動にはかなりの時間を要した。

3. CALL 環境

2000年にCALL教室が設置されて以降、学習環境が一変した。学習者はコンピュータのモニターとキーボードを目の前にして、フランス語を学習することになる。

CALL教室のメリットを活かすため、2000年11月より、動詞活用学習支援の一環として、Web上に

「フランス語活用虎の穴」という活用練習ツールを作成した（<http://www.lang.osaka-u.ac.jp/~iwane/katsuyo/>）。このツールは、すべての法・時制の活用練習ページへのリンクで構成されており、学習者は必要に応じて個々の活用練習ページにアクセスすればよい。各活用練習ページは、人称代名詞が無作為な順番で提示され、そこに応じて入力された動詞の活用形の正誤を判定した上で、正答数と正答率を表示するという簡素な仕組みになっている。

CALL教室では、中央のコンソールから授業中に練習するページのURLを配信すれば、端末側でブラウザが起動しそのページが表示されるので、学習者が自分でそのページにアクセスする必要がなく、効率的な授業運営が可能になる。また、「活用虎の穴」の個々の練習ページは練習の進捗に応じて背景色が変わるようになっているので、コンソールから全員の進捗状況を把握することができる。

このツールはネットで「活用虎の穴」を検索すればわかるように、現在でも様々な学習者が利用しているようである。また、白水社から、Web版「活用虎の穴」のコンセプトをベースに書籍版の拙著『フランス語動詞活用ドリル虎の穴』（白水社、2018年）が出版され、ネット環境を利用していないフランス語学習者に活用練習の便宜を供している。

語彙の学習については、従来と変わらない方法をとっていたが、2012年に神戸大学の廣田大地氏による「フラ単 ～フランス語 単語練習 WEB アプリ～」<http://www.literature.jp/numerique/vocabulaire.html>の公開以降は、それを利用するよう促している。

この語彙学習支援ツールの特に優れた点は、学習目標の単語の範囲を指定でき、またそれをリストとして出力できることである（詳しくは、廣田大地「フランス語単語練習 WEB ページ「フラ単」を用いた授業運営について」、Rencontres Pédagogiques du Kansai(関西フランス語教育研究会)、(29) 29-32、2015年7月：http://www.rpkansai.com/bulletins/pdf/029/029_032_hirota.pdfを参照）。授業中に実施される単語テスト（CALL教室では、大阪大学で導入されている Learning Management System、CLE を用

いて実施している)に備えて、このツールを利用して
いる受講者は数多い。

毎授業のはじめに行う文法項目の確認テストは、
以前と同じように行ったが、CALL 教室での正解の
確認は、学生端末間に設置されている中央モニター
に、Web 版の『きりとるテスト』(初版は 1999 年に
作成：

<http://www.lang.osaka-u.ac.jp/~iwane/minitest/iframe.html>
ml) を使って、説明をしながら順次正解を表示する
ことで、黒板・ホワイトボードを使うよりかなり時
間を節約できた。

教科書の練習問題は、あらかじめ CLE 上に作成し
ておき、中央モニターで学生答案を添削することに
より行う。これもまた大幅な時間節約となる。

以上のような時間節約が恒常的に行える結果、文
法説明や他の練習問題により多くの時間を割くこ
とが可能になった。

4. CALL、スマートフォン、タブレット環境

コンピュータや Web 資源を用いることで、学習者
は効率的な語彙学習や文法事項の練習ができるよ
うになる一方、CALL 教室では、教員は授業中コン
ソールを通して、適切なタイミングで練習問題を提
供したり、学習者の学習進捗状況を確認したりする
作業、つまり学習者管理の作業が授業活動の中で大
きな位置を占めるようになってくる。長らくこのよ
うな状況の中で授業実践を行っているうち、CALL 教
室という共同空間にいながらも、教員と学習者の間
に介在する機械の存在に対して、身体的な違和感を
抱くようになってきた。

自分自身の授業実践を見直し、CALL のメリット
とデメリットを認識するために、2014 年度の 1 年間、
全く CALL 教室を使わない授業実践を行った。普通
教室での授業といっても、学習環境はかつてと全く
異なり、学習者はスマートフォンを通じてネット上
に資源にアクセスすることができ、教員は教室に設
置されたプロジェクタで持ち込みパソコンの教材を
提示することができるようになっていた。

語彙と動詞活用については、授業中端末を利用

できないので、Web ページの利用法を説明するにとど
め、学習者の自律的な学習に期待した。授業中は主
に動詞の活用を手を使って書くことによる練習を行
った。毎授業のはじめに行う文法項目の確認テスト
は同じように行ったが、その際の正解確認は、教室
のプロジェクタを用いた。教科書の練習問題につい
ては、CLE での自習は継続したが、添削については、
板書型に戻った。CALL 教室では、CLE の学習者の
答案を中央モニターに提示し、必要に応じてホワイト
ボードで説明を加えることができたが、プロジェ
クタのスクリーンを用いると、黒板が利用できない
ためである。

この時期ちょうど全学教育講義棟に整備が整った
HALC (Handai Active Learning Classroom) を使用す
る機会を得た。この教室には、受講者各人が一人一
機利用できる iPad が備えられており、プロジェクタ
は直接壁面のホワイトボードに投影される使用にな
っている。

HALC を利用することによって、劇的な改善が見
られたのは教科書の練習問題の添削である。受講者
は、授業外では CLE 上に作成された練習問題での自
習行い、授業ではノートにやってきた練習問題を
iPad で撮影し、「ロイロノートスクール」という学習
支援アプリで教員に提出する。教員は送られてきた
答案を壁面に投影して、投影された答案に直接マー
カーで添削を行う。こうすることによって、板書添
削の利点を活かしつつ、時間を大幅に節約できるの
である。

2015 年度以降は、HALC と CALL 教室の両方を用
いて授業実践を行っている。HALC と同様、CALL
教室にも「ロイロノートスクール」が導入されてい
るが、CALL 端末には撮影機能がないため、練習問
題の添削の際は、受講者のスマートフォンに「ロイ
ロノートスクール」をインストールしてもらい、答
案の撮影および提出をしてもらっている。スマート
フォンを利用しない受講者には iPad を貸し出すこ
とで対応しているが、現在ではそのようなケースは多
くはない。提出された練習問題画像の添削は、教師
側の iPad とタッチペンを利用し、中央画面に投影す

るとう方法を用いる。必要に応じて教室のホワイトボードも使用している。

5. おわりに

ICT の発展に伴い、学習者は ICT を活用した様々なタイプの学習手段を利用できるようになってきた。従来の学習法に加えて、このような学習手段の選択肢が増えることは望ましいことである。教員としては、こういった環境の中で適切に学習支援を行えるよう、切磋琢磨の日々が続く。